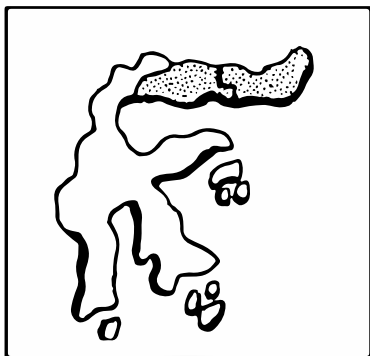




日本人会会報

北スラウェシ日本人会
NORTH SULAWESI JAPAN CLUB

Tarsius

タルシウス

第36号



マナドの眺め（ピネレンから撮影、ブナケン島、シラデン、ナイン島も見える）撮影：中村

平成31年3月発行

目 次

01.	日本語パートナーズより寄稿		
1.	マナドに配属されて	佐々川 修二	P. 02
2.	未知の地、北スラウェシへ	大久保 咲希	P. 05
3.	Kota Manado yang kucintai ～愛土～	津留崎 真由	P. 07
02.	日本語カップ「漢字・文字」レポート	中村 高太郎	P. 09
03.	天皇誕生日レセプションレポート	中村 高太郎	P. 13
04.	トラジャ旅行記	今泉 宏	P. 16
05.	鯨を食べよう(Ⅱ)	長崎 節夫	P. 21
06.	編集後記		P. 27
07.	北スラウェシ日本人会会員名簿		P. 28

マナドに配属されて、、、

日本語パートナーズ

佐々川 修二

「ずいぶん空が青々としていて、広いなあ」。10月1日、マナドの空港に降り立ったときの第一印象です。研修で1週間滞在したジャカルタは高層ビルが林立し、人口も密集。慢性的な交通渋滞もあって、晴れていても薄くベールがかかっているような大都市。だから余計にそう映ったんですね。

夕方近く、アルヤドゥータホテルから見えた、輝く海に浮かぶ「マナド・トゥア」と「ブナケン島」。これからの半年間を明るく照らすようでした。

国際交流基金の「日本語パートナーズ」というプログラムに参加して、ここマナドにやってきました。東南アジアの国々で、現地の日本語教師のアシスタントとして、高校生の理解の手助けをするものです。言葉だけでなく、互いの文化を学びあう相互交流の架け橋。それが「パートナーズ」というわけです。

新聞記者の名刺で36年間、暮らしてきました。主にスポーツの分野でした。やりがいも、面白みもある仕事ですが、「定年」を機にこれまでとは違う何かに挑戦したいと考えていました。しかし、これといって身についた技術もさしたる能力もなく、一番近いかなと選んだのが「日本語教師」です。この「日本語パートナーズ」に資格は不要ですが、新米には恰好のスタートかなと応募しました。

北スラウェシ州には8人が派遣されました。僕以外の7人は大学生を中心にみんな20歳代で、一人だけ突出しています。先生もやりづらいらうなあ。まあそれでも、高校生を教えるのに、年齢は関係ないだろうと自分を励ましています。担当はSMA1マナドとエベン・ハエザル高校。日本語を学び始めた高校1年生のクラスでは、僕がひらがなを発音する、その口元に目を凝らして、大声でリピートしてくれます。その姿を見ていると、こっちも頑張らなきゃって思いますね。

授業だけでなく、日本の文化を紹介するというのも、大きなテーマです。

そんな大げさなつもりではないのですが、僕は教室や職員室で、あいさつ代わりにと、「横綱土俵入り」(のようなもの)を披露して回りました。せり上がりで、左手を胸に当てて右手

を伸ばす雲竜型です。相撲はみんな割とよく知っていて、真似をする男子も多かったです。職員室では合いの手で「さしみ！」とか、「ふじさん！」とか、自分の知る限りの日本語を叫んで盛り上げてくれる先生もいて、なかなか楽しいひと時でした。

「書道」もなかなか面白かったです。最初は「夢」とか「希望」などの文字で、手本を示してと思っていたのですが、高校生は自由に書きたがる。それならどうぞとすると、2年生の女の子は「流れに逆らって」。若者らしい言葉です。ほかにも、「天才」や「男」と書いて上機嫌な1年生や、「拉麺」を正確に書いて、どうだ！　と言わんばかりの表情の1年生も。「もえてきたぞ」「これは心配です」となると、何を考えているんだか。日本のアニメの影響なんでしょうね。でもみんなイキイキとした表情で、筆を持って取り組んでいました。

「日本の伝統スポーツ」の紹介では、説明だけでは面白くないのではと、一緒に体を動かしてもらいました。

まずは相撲の「四股（しこ）」。足腰など下半身の強化だけでなく、大地を踏んで悪霊を払うという意味もあるそうです。慣れない動きにも嬉々として取り組んでくれました。柔道では「立礼」。かかとを合わせてつま先を30度くらいに開き、お辞儀。3秒くらいその形をキープ。「日本では自己紹介の時などにも頭を下げて礼をすることがあります」と付け加えて、みんなでチャレンジ。なかなか様になっていました。

仕上げは、紙相撲。画用紙を切って、お相撲さんを描き、「しこ名」もつけての「マナド場所」です。トントン、トントンと紙の土俵を叩いては「オオッ」とか「ア〜」などと、笑い声と悲鳴が交錯していました。

「日本の高校生の制服」も紹介しました。

学ランやセーラー服を嬉々として着込み、互いの撮影に忙しい姿は微笑ましいばかりでした。学生服。僕らの世代には、舟木一夫さんが学生服で歌った「高校三年生」が懐かしいですね。「♪赤〜い夕日が　校舎をそめ〜て」。その後、紫の学ランで歌っていた藤正樹って歌手もいましたね。

慣れない異国での生活。若い人たちにもですが、シニアにとって心身の健康管理はとりわけ大切だと考えています。マナドの空気になじむとともに、地理の確認を兼ねてのジョギングで汗を流しています。

ワケケの住居から、「パサール45」やマナド港、スカルノ橋を渡ってシーフードレストランが立ち並ぶ地域。南へは、「コニー」からマントス、サム・ラトゥランギ大学、クラバット競技場など。知らない街をブラブラするのは楽しいですね。

日曜日はヨガ。学校の先生に誘われての参加です。メガマスのクリスマスツリー近くの海辺で朝7時前から。ゆったりとした動きなのですが、流れ落ちる汗の量が半端じゃない。

そして、念願のスキューバダイビング！

実は、派遣地がマナドと決まり、「えっ、一体どこ？」と調べていくうちに、世界有数のダイビングスポットと知りました。それならばと「六十の手習い」で潜水をスタートしたばかりです。こわごわ、及び腰での挑戦ですが、それでも海の底へと垂直に沈んでいく“断崖絶壁”の「ドロップオフ」で、多彩なサンゴ、色とりどりの魚の群れ。そして小魚を狙う回遊魚や悠々と泳ぐウミガメなどを間近にするなど、「贅沢な時間」を堪能しました。

あっという間の3か月でした。そしてこの間、今泉会長をはじめ、日本人会のみなさまには本当にお世話になっています。歓迎会や長崎さんの外務大臣表彰、忘年会等々。いろんな話に感心させられたり、考えさせられたり。70歳を超えてなお若々しく生活されている方々の話に圧倒されたことも。自分のこれからを考えるお手本とさせていただきます。

人、そして自然との出会い。マナドに来られた幸運をかみしめています。

未知の地、北スラウェシへ

日本語パートナーズ

大久保 咲希

会員の皆さま、こんにちは。日本語パートナーズとしてマナド（SMA Pioneer/ SMKN1 Manado）に派遣中の大久保です。今年は、歓迎会や長崎さんの表彰式等で、皆さまから色々とお話を伺うことができ、非常に光栄でした。いつもお招きいただきありがとうございます。残念ながら忘年会は小学生以来、十数年振りの発熱で参加は叶いませんでしたが、またの機会に皆さまにご挨拶をできればと思います。また、今回は会報への寄稿の機会をいただきありがとうございます。

もともと私がインドネシアに興味を持ったのは、大学時代にバティックという美しい染物を知ったからです。さらにユネスコが指定する世界無形文化遺産に登録されたと知り、国際関係学科に在籍していた私は卒業論文のテーマとして、世界無形文化遺産についてバティックをケーススタディーに書くこととなりました。大学4年に上がる前の春休み、3週間ジャカルタ・ソロ・ジョグジャカルタでフィールドワークをしたのが、私にとって初めてのインドネシア滞在でした。当時、バハサは全くできず、決して流暢ではない英語と日本語で現地の学生達にインタビューをしたものでした（出来上がった論文の質は言うまでもありません…苦笑）。

もともと学生時代、趣味はバックパックで、バイト代は全て旅行につぎ込み、東南アジアはもちろん、南米や近場の台湾、そして少しヨーロッパとアフリカ、計20カ国ほど訪れました。それでもインドネシアの人の良さ、ご飯の美味しさが忘れられず、一番好きな国といえばインドネシア、と毎回答えるほどでした。いつかまた訪れたいとずっと思いながらこの数年を過ごしていました。

就職を機に、海外へはなかなか出ることができませんでした。ですが、会社員時代、転勤先の広島市役所へ転入届を出しに行った時、インドネシアを派遣先を含む、日本語パートナーズの説明会のポスターを発見。その場で申し込み、その後エントリー、そして合格を頂き、退職、そして今に至ります（余談ですが、広島生活をしていた街はNPの佐々川さんの地元でした。不思議なご縁です）。

もともとジャワしか知らない私は、インドネシア=ジャワのイメージです。そのため、派遣先が北スラウェシのマナドと聞いた時には、ジャワではないことに少し落ち込み、更にはネットで調べても数少ない情報しか出てこないマナドに対して不安しかありませんでした。しかし今となっては、文字通り“最高”の街だと感じています。もちろんマナド以外の北スラウェシ全体が大好きです！近くの綺麗な海や山、開放的な雰囲気と、美味しい食事、そして人の温かさ

に幸せを感じる毎日です。特に、こんなにも日本からアクセスが悪いこの地でも、たくさんの人が日本語を学んでいて、日本を好きでいてくれることを非常に嬉しく思っています。日本人が少ないこの街では、私たちが彼らの日本人のイメージに直結すると思うと責任を負っているなあ、と思うこともあります。でも、だからこそ色んな人と接したいと思わせてくれます。

また、ここではイスラム圏の文化を意味するような、いわゆる“インドネシア文化”を感じることは少ないですが、一括りにできないことも含め、インドネシアなんだなあと感じているところです。学校でムスリムの生徒用の長いスカートををはきながら、ジルバブをせずに登校してきた女子生徒を見たときは、とても驚きました。短いスカート履きこなすムスリムの女の子たちも多く、まさに、教科書や研修では習わないことが、ここにはたくさんありますね。

すっかりマナドの虜になってしまった私は、こんなに素敵なところを日本人の多くは知らないのか！！と、残念に思うと共に、もう少し自分たちだけの秘密にしておきたいような気持ちにもなっています。NP として残り 3 ヶ月、引き続き日本の魅力を学生達に伝えていくのはもちろんのこと、やっぱり、北スラウェシの魅力を日本にいるみんなに伝えていきたいと思います。

もともと短い滞在の残りもわずかとなりましたが、2019 年も引き続きよろしくお願い致します。

Kota Manado yang kucintai ～愛土～

日本語パートナーズ

インドネシア 10 期 津留崎 真由

私は 2018 年 10 月から 2019 年 3 月まで、日本語パートナーズとしてマナドに派遣されました。日本語パートナーズ（NP）の役割は、「現地日本人教師のアシスタント」「日本とインドネシアの情報発信」「日本のファンを増やす」ことです。

派遣先では、週 1 回の日本語クラブや授業で日本文化を紹介する時間を設けられました。SMAN9 MANODO は、田中つぐみさん、大内梨央さんに続き、私が赴任しているので、学校の先生や生徒も NP の存在をすでに知っている中の活動でした。なので、同じ内容になってしまうこともありましたが、日本文化紹介の内容を少しでも工夫できるように考えました。例えば、「書道」。私はみんなで同じ文字を書きたいと思い、生徒に「愛土（マナド）」の漢字を提示しました。「愛土」は、漢字の意味のまま、「愛する土地」です。やはり、「愛」の意味は多くの生徒が知っていたので、「愛土」の意味を説明すると感心してくれ、たくさん練習してくれました。日本に興味をより持ってもらえる、第一歩なったかもしれません。「愛土」はマナドの多くの人に、伝えたいです！他にも、「たこ焼き」「巻きずし」。具材は全て NP が用意するのではなく、生徒たちに持って来てもらいました。生徒たちに持ってきてもらうことで、作り方さえ覚えていれば、NP が日本に帰ったあとでも、「日本料理」を自分たちだけで作れる喜びをより感じられると思ったからです。現地日本語教師も「巻きずし」は今回初めて作ったらしいですが、実際に、家で巻きずし作りに挑戦してくれたそうです！「日本を知ってほしい」「日本を好きになってほしい」という私の気持ちが、少しでも伝わっているのではないかと思います。

私たちも、北スラウェシ州マナドに派遣されてはや 3 か月。すでに、マナドが大好きです！旅行へ行ってもマナドに帰ってくると、やっぱり落ち着きます。気温の暑さは少し感じるときはありますが、海も山もあり、近くにはモールがあり、私にとってマナドは居心地がいい場所です。マナド人の明るく元気な楽観的な性格、冗談が好き、辛い食べ物が好き、ダンス・歌が好き、そんなマナド人が私も大好きです！「kota Manado yang kucintai」は「私が愛するマナドの町」という歌です。生徒と歌うことがあり、生徒が楽しそうに歌うのを見て、私も元気をもらえましたし、何と言っても、自分たちが暮らすマナドがとても好きなんだと感じました。自分が暮らす町を大好きであることはとても大切なことだと思いました！

NP としての活動も、残りあと3か月。悔いを残すことなく、今までより「日本のファン」を増やせるように頑張りたいと思います！

最後になりましたが、北スラウェシ日本人会の皆様、お忙しい中、食事会等を開催していただき、北スラウェシのことたくさん教えていただき、ありがとうございます。日本人が少ないこの町で、皆様に出会えたこと、とても嬉しく思っております。今後とも、日本語パートナーズを宜しくお願い致します。

【写真：書道の文化紹介】



「kota Manado yang kucintai～愛土～」

日本語カップ「漢字・文字」レポート

中村 高太郎

2月27日（水）にマナドのペコペコクラブとマカッサル領事事務所の協力で開催された、日本語カップ「漢字・文字」があり、北スラウェシ日本人会からも、今泉会長に代わり、中村が審査員を務めさせていただきましたので、ご報告いたします。

今回は特に日本人会会員の企業・個人様より、寄付を頂き、それによって、日本人会から賞品を用意することができましたことをこの場をお借りして御礼申し上げます。

（寄付・賞品につきましては、詳細は後述いたしますが、後援いただきました企業・個人様には大会の結果および賞品等の使途に関しての報告をさせて頂いておりますが、より一層の日本語の学習と日本文化に触れる一助となりますように選定させていただきました。）

日本語カップは、今回で8回目になるとのことで、大会は、テレコム（電話会社）社の大会議室で行われました。漢字の部と文字（ひらがなカタカナ）の部からなっており、今回は漢字と文字の両方で100名近くの参加者があり（前日の応募の時点では100名を超えていたという）、開会のあいさつでは、ほぼ会場は埋め尽くされていました。



開会の挨拶（マカッサル領事事務所の宮川所長）



踊り・ダンス（ペコペコクラブメンバ）

大会の形式としては、審査員はマカッサル領事事務所の宮川所長、日本語パートナーズから2名、日本人会から1名の合計4名で、開会のあいさつの後、漢字の部の次に文字の部が行われる形で、参加者は問題の回答をプラカードに書くというものでした。問題は、6レベル用意されていて、各レベル10問の問題から構成されています。また各問題は回答時間が設定されており、参加者の皆さんは、真剣な眼差しで、細く微笑んだり頭をひねったりと、なかなか有

意義な時間でした。

問題の最初のレベルでは、○×かの単純な回答から始まるのですが、その後、出題方法も文字や発音、絵などで、回答も○×だけでなく、漢字や文字での回答という多彩な内容で、問題の内容や、参加者の回答には、審査員も悩ますものもありました。（もちろん、難しい問題の場合、正解者がいないという場面もありました）



会場の様子（開始前の緊張の面持ちで
出題と回答方法の説明を聞く参加者たち）



出題例（漢字の部/穴埋め問題の一つ
ここでは、追（加）、参（加）で加が答え

具体的な問題の例としては、..

漢字部門では、参（ ）、追（ ）で（ ）に入る共通の漢字は何かといった出題もありましたが、この例では、回答として、「加」という文字が入る事になっているのですが、中には「考」という漢字を書いた者があり、そうすると「参考」という言葉は問題なしだが「追考」という言葉は、普段あまり使う機会ないため、ありそうではあるが・・・ということで念のため辞書で確認といった一幕もありました。（もちろん追考という言葉は確かにあるので、審査員一同、正解としました。）

文字部門（ひらがな・カタカナ）でも、色々なタイプの問題が用意されていましたが、例えば一例として、絵を見てそれが何であることを日本語で書くという問題がありました。

これは、ある問題の絵が、「階段」の絵だったりします。そうすると回答者は、「かいだん」「階段」といった回答があるが、中には「てすり」といったものを回答してきたりと想像力は豊かで、審査員同士も、確かに間違いではないから、どうしようかと申し合わせるなどほっこりした場面もありました。（もちろん絵は手すり付きの階段だったので正解としました。）

一方で問題のレベルとは関係ありませんが、審査員にとっては、参加人数が多く（うれしい事です）、プラカードをに書かれた回答、○×は、まだしも、文字（特に微妙なもの）の判定と集計といった作業が、大変でした。しかし、いろいろな人の回答を見ることができ、大変、面白い経験だったと思います。

ペコペコクラブは、現在100名近くのメンバが登録されており、その中でも、25名前後がアクティブに活動しているということでした。クラブの名称である「ペコペコ」というのは、発足当時「皆、食べることが好きなので、ペコペコにしよう」となったということです。

クラブでは、今後も日本語に興味がある人たちと一緒に日本文化や日本語を勉強し交流活動をしていきたいと意気込みを語っていました。皆様も機会がありましたら是非、彼らに協力したり支援をして頂ければ、そして、さらなる日伊の文化交流が活性化して、日本語だけでなく文化風習にも共感を持っていただけるようになると思います。



大会終了後の集合写真

前述しました、賞品につきましては、今回は、本屋でいろいろと辞書（日⇔伊）や日本のガイドをどれにしようかと迷いました。辞書やガイドブックも、実際に手に取ってみると、ところどころにおかしい記載があるものが、かなりあることが分かりましたので、この辺も複数の辞書を手に取って、比較するなどして、気を使いました。また、選定には私だけでなくペコペコクラブのセプティアンさんにも同行して選定にご協力頂きました。

ご寄付を頂きました、企業・個人様
PT. Horiguchi Sinar Insari (今泉さん)
LPK. TSUNAGU Japan Indonesia (戸田さん)
LPK. Angin Selatan (長崎さん)
PT. Fresh Tuna Indonesia (阿部さん)
個人、 木谷さん
改めて、ご協力ありがとうございました。



賞品の例

辞書・参考書3冊を基本とし、漢字の部は漢語辞書、文字の部は、平仮名メインの参照書を基本として、ポーチバックを順位に応じて選定させて頂きました。

優勝者の紹介

○漢字カップ（漢字部門）

1 位 ルックマン・バタリ君（マカッサル・ムハンマディヤ大学・言語サークル）

2 位 リバルディ・ヘリヤント・ニコデムス君（マナド国立大学・日本語教育部）

3 位 サラ・ロティンスルさん



漢字部門優勝のバタリ君



2位のニコデムス君



3位のロティンスルさん

○文字カップ（ひらがな・カタカナ部門）

1 位 クリスチャン・リオグ君（トンダノ第1国立高等学校）

2 位 アンジェリン・リディア・コジャンソウさん（マナド・エベンヘーザキリスト高等学校）

3 位 ナタシャ・ダンデルさん（マナド・エベンヘーザキリスト高等学校）



文字部門優勝のリオグ君



2位のコジャンソウさん



3位のダンデルさん

漢字・文字カップの各々部門の優勝～3位の皆さんには、今回の入賞おめでとうございます。

そして、今回、入賞にならなかった参加者たちも、もっと、勉強して是非、機会があれば日本へも行って、日本の良いところをたくさん見て頂き、ご活躍されることを期待しているところでございます。

中村

天皇誕生日祝賀レセプションレポート

中村 高太郎

昨年の11月27日（火）にマカッサルで天皇誕生日祝賀レセプションが行われました。昨年と同様に日本人会の会員の方々には、招待状が届いていたと思います。

今回のレセプションでは天皇誕生日祝賀のほかにヌルディン・アブドゥラ 南スラウェシ州知事の外務大臣表彰(※)伝達式がありました。この為、前年度よりも招待客や会場の規模は大きくなりました。この外務大臣表彰は、先日北スラウェシのビトゥン市にある日本人墓地と慰霊碑の維持管理に長年尽力されている長崎節夫さんが、またマカッサル市の慰霊碑を長年管理されているマリア・ラトゥランギ・マカハウベさんも表彰されているもので、スラウェシ島からは3名が表彰されたことになります。

（※外務大臣表彰は、国際関係の様々な分野で多くの方が活躍し、我が国と諸外国との友好親善関係の増進に多大な貢献をしている中で、特に顕著な功績のあった個人及び団体について、その功績を称えとともに、その活動に対する一層の理解と支持を国民各層にお願いすることを目的としています。・・・在マカッサル領事事務所のニュースリリースより引用）



レセプションに際して同時に行われました、宮川所長挨拶とヌルディン・アブドゥラ 南スラウェシ州知事の外務大臣表彰伝達式の様子

さて、今回は、北スラウェシ日本人会からは、今泉会長や長崎さんも出席され賑やかになりました。そして、今回のレセプションは、現天皇が退位されるため、平成の最後のレセプションとなり、次回の誕生日祝賀レセプションは、新天皇でのレセプションとなる為、即位されるのが5月になることから、今年（2019年）は行われず来年になるかと思います。

それでは、レセプションの様子をレポートしたいと思います。

レセプションの会場は、今回は、フォーポイントホテルで執り行われ、会場も広く、出席者は、前回同様、多くが南スラウェシ州からで、南スラウェシ日本人会のメンバをはじめ、現地の政府・大学関係者も招待されていましたが、前回よりも大人数でした。また北スラウェシ州からも日本人会だけでなくサムラトゥランギ大学関係者が出席されていました。（大学関係者は、昨年度も出席されていたようです）

レセプションの流れは、今回は、初めに食事があり、その後、レセプションが始まるという前回と逆の流れでした。今回は、流れを逆にしたためか、食事をして、一息ついたところでレセプションが始まるということで、大変スムーズではありました。（スタッフの方に聞いた話では、意図的にそういった効果を狙ったものではなく、賓客のスケジュール等の関係で急遽、順番を入れ替えたのだとか・・・）

食事については、前回よりグレードアップした船盛の寿司や現地料理（今回は現地料理もグレードアップしていて一段と美味しかった?!）などがあり、寿司については、前回以上に長い行列ができていました。もちろん前回同様、その場で握って船に補充していました。お酒のほうも、日本酒のほかに焼酎にワイン、、、と前回よりも銘柄が増えていました。



今年も出ました船盛の「寿司」



日本酒（他にも焼酎にワイン、ビールも）

料理を堪能した後、いよいよレセプションの本編が始まりました。

レセプションでは、ヌルディン・アブドゥラ南スラウェシ州知事の外務大臣賞の伝達授賞式があり、知事のスピーチがありました。知事は日本の九州大学（福岡）での留学経験もあり、インドネシア語に加え、日本語でもスピーチをされていました。



長崎さんとマリア・ラトゥランギ・マカハウベさん

（マカハウベさんは、日本人の戦没者慰霊碑の場所として、マカッサル郊外の自宅の前庭を無償提供し、慰霊碑の維持管理を 30 年以上されている）

おわりに、、、

前回より私、中村が、北スラウェシ日本人会での、天皇誕生日祝賀レセプション招待状に関しての対応をさせて頂いておりましたが、会員の皆様のご理解とご協力に感謝しております。

このような機会を通して、会員の皆様と領事事務所関係者や南スラウェシ日本人会の皆様、さらには広くインドネシアの方々との交流が活発になりますとよいと思っております。

マカッサルはマナドから遠く交通手段やコスト的にも気軽に出席というのは、難しいと思いますが、何かのついでがあれば、是非、出席されると、日本料理だけでなく、南スラウェシの日本人会のメンバも多数出席されているので、交流もできるのではないかと思います。

中村

※今回は、写真はあまりとっておりませんでしたので、いくつかの写真は、長崎さんから提供いただきました。

タナ・トラジャ旅行記

今泉 宏

グィーン、ガガガガ、、、ブゥーン、、、ジェットコースターより間違いなくスリルがある。真っ暗闇の中、目をつぶって手足を踏ん張る。そう、これはマカッサル―トラジャ間を走る夜行バスの中だ。

スラウェシに住んでいるのに一度も訪れたことのなかった世界的に知られる観光地タナ・トラジャ。今回天皇誕生日レセプションに出席するためマカッサルへ行くことになったが、それだけでは旅費を自腹で行くのが勿体ない。ということでタナ・トラジャまで妻と子供2人を連れて足を延ばすことになった。移動方法はどうやらバスか車のチャーターぐらいしかないらしい。(後から聞いた話ではポロポまで飛行機で移動してそこから陸路という方法もあるそうだ。)車のチャーターだが調べたらバカ高い。それに対してバスは寝台付きバスが寝台席で21万ルピア、広々としたリクライニングシート席で18万ルピアだという。激安である。私と妻、子供2人で3席の寝台席を利用したが、小さい子供は親と同じ寝台に入り追加で7万ルピアを払ったので合計71万ルピアだった。

このバスに乗って困ることはトイレと到着時刻である。バス内にトイレは無い。トイレ休憩はあるもののそれ以外でトイレに行きたくなった時に大声で運転手を呼ぶのは勇気がいるので日本人には難しい。私は帰りのバスでトイレに行きたくなり運転席まで移動してトイレ休憩を頼んだが道がクネクネでバスはとばすので移動するのにはかなり危険がともなった。でも、頼めばガソリンスタンドなどに止まってくれる。小学生の息子などはミネラルウォーターのペットボトルに小用を足していたが、私も一度は我慢ができずに試みてみた。物を中に差し込むのはさすがに無理だが上手に連結して漏れないようにしたらうまくいった。次は空のペットボトルを用意しておいてこの手でいこう。女性の場合は病院で使う尿瓶とペットボトルを持っていったらよいのではないだろうか。または大人用紙おむつか。トイレの話など公の場で声を荒げて長々と話すのもどうかと思うがやはりこの問題は深刻であるから詳細に報告をしておく。今度このバスを利用される方があったら緊急事態の対応を予め考えて行かれたらよいと思う。夕方ぐらいからは飲食を控えるのも手である。

そしてもう一つの問題点、到着時間だがバスは昼便と夜便があり昼便は夜に着くので問題ないが、早朝に着く夜便は到着してからどうするのか準備しておかなくてはいけない。通常ホテルは昼からのチェックインなので早朝に着いても休む場所がない。私はウェブサイトでホテルの口コミを読み、早朝に到着してすぐに入室させてくれたという書き込みのあったホテルを選択した。口コミの通り6時ごろ到着したが7時には部屋を用意してくれた。Luta Resort というホテルだ。おそらく別のホテルでも同じような状況の観光客が多くいると思うので対応できるホテルはあると思う。入室できない場合でもどこかへ行き先を決めておけば荷物だけホテルに預けて早々と旅を楽しむ手もあるが家族連れの場合はきついかもかもしれない。

忘れるところであった。冒頭の幼稚な擬音語表現だがまさにそのまま、このバスはクネクネの道をガンガン走るのだ。何も見えないのでいきなり左右に振られ体は翻弄される。逆に道が見えたらもっと怖かったのかもしれない。あれだけ揺れたのだからおそらく少し間違ったら崖に転落というような道だったのではないだろうか。妻と子供たちは早々に酔い止めを飲んでぐっすり眠ってしまったからトラジャに到着して皆下車してから目を覚ましていた。よく眠れて快適なバス旅だったそうだ。私はやたらと薬を飲まない主義なのでノーマルの状態で寝台に入ったがさすがにあれだけ揺さぶられたら普通の人は起きるだろ。そして急降下からの急カーブの連続で肝を冷やすのである。

生命保険に加入していないことを後悔し、家族4人が亡くなり1人娘が残されて親戚に預けられメイドのような扱いを受けることを想像して辛くなった。そして神にお祈りをしながらまた夢の中に戻っていくのである。正直このバスの利用を他人に勧めてよいのか迷うところである。利用される場合はある程度の覚悟と準備をされた方がよいかもしれない。

さて、トラジャ初日は早朝から活動しているので一日が長い。そうそうトラジャの中心はランテパオという町で天空の町という意味らしい。天空の町というだけあって早朝はかなり冷えている。ホテルのすぐ前に小さなパサールがあったので子供たちと妻の上着を物色しながら少し散策をした。妻は高原地帯に旅行に行くのに長袖の上着を用意していなかったのである。私は当然自分の分は用意していた。が、自分だけ用意するという冷ややかな視線を浴び、申し訳なさげに一人だけヌクヌクとしていた。そしてパサール、いきなり目についたのは小さなピーマン型の唐辛子だ。話を聞くととても辛いらしい。その後昼食で食べたアヤムゴレンについていたサンバルがめちゃくちゃ辛かったがこの唐辛子が入っていたようだ。

軽い散歩から帰るとホテルの部屋が用意されていたので取り敢えずマンディーをして少し体を休めた。折角みな早起きをしたのだからまずは私の第一目的のキーコーヒー社（トアルコ・ジャヤ社）のコーヒー農園へ行こうということになった。実は前々日に例のレセプション

でキーコーヒーのコーナーがあり駐在員の藤井さんと名刺交換をしていたのでさっそく電話をすると案内をするので一緒に行きましょうとなった。本当はうちが車を用意していなかったら同社の四駆に同行できたようだが、車をチャーターしていたので2台で行くことになった。

最初はきれいな道路だったがだんだん山道に入ると舗装が途切れ途切れになり間もなくガッタガタの道になりそれを延々と上って行った。自分は問題なかったが最初寝ていた妻と子供が起きだすとグダグダと文句を言われるのではないかと心配しながらハラハラして道中をじっと耐えていた。何とか到着すると高地特有の澄んだ涼しい空気に覆われ家族の機嫌も自然とよくなっていた。そしてトアルコ・ジャヤ社の農園で飲むトラジャコーヒーは最高であった。そこで駐在員の藤井さんのお話を聞きながらコーヒーを頂き少し休憩をした。

ちょうど昼食時になったので藤井さんの用意してくれた例のアヤムゴレンを辛いサンバルをつけながら頂いた。その後、頂上まで行きましょうと誘ってくれたので会社の四駆で見晴らしの良い頂上へ行き写真もたくさん撮った。これで妻のご機嫌は完全に直ったようだ。オランダ統治時代に始まり当時は王室御用達だったトラジャコーヒーも農園は戦後荒れ果て、70年台にキーコーヒー社が周辺の村人と共に年月をかけ復活させたのだそうだ。

今でも従業員の大半は近隣の住民たちで会社の農園以外の村人個人の農園からもコーヒー豆を買い付けているそうだ。しかも会社の農園内には村人も生活用として使っている水源があるため、農薬の人体への影響や環境問題、保水力の問題などを考慮して農地の3分の1ぐらいは休ませているそうだ。50年近くもの間会社を続けていられるのもこのような地域に寄り添った経営方針があるからなのだと思います。とても感心させられ、見習わねばと感じた。

町からトアルコ・ジャヤ社農園への道中にはケテ・ケスという昔ながらの伝統家屋が立ち並んでいる場所がある。本来は伝統的な昔ながらの村なのだが村というより観光地である。バリなどにも昔からの伝統を守り続けているような集落がありそこを観光客が見学するというような場所があるがそんなノリなのだろう。

トラジャと言えば皆が思い浮かべる家屋のことを「トンコナン」というが、ここへ行けばトンコナンが立ち並んでいる風景を見ることができる。実はトンコナンはトラジャのいたるところで見ることができるが多くは現代風になっており、明らかに違うのは屋根がトタンになっているところである。昔ながらの物は竹を割って上下互い違いに咬み合わせたものを何層も積み重ねてある。

因みに現代風トンコナンのお値段は倉庫用の小さいもので60ジュタ、住居用の大きなもので500ジュタだそうだ。この集落を通り過ぎると小道があり両側に土産物屋が数件立ち並んでいる。ランデパオに到着した時から感じていたがケテ・ケスのようなメインの観光地でも思いの外観光客が少ない。土産物屋を通り過ぎると住居として使えるぐらいの大きなお墓が数件ある。そして切り立った崖がありところどころ窪みがあり棺桶や人骨が散乱していた。本来は

並べて置いてあるのだと思うが一部朽ちたりして散乱しているような感じになっているのだと思う。そこから上に続く階段があったが何か作業中で進入禁止になっていた。他の方のブログなどを読むと洞窟があり棺桶が詰め込んであったり骸骨が並んでいたりするらしい。このようなお墓は貴族の親族のお墓であり誰でもこの洞窟のお墓に死後入ることができる訳ではないそうだ。

このような場所は他にもありこの後ロンダという別のお墓を見学に行った。正直お墓を見たいとは思わなかったのだけど妻が次はどこのお墓に行くのだとガイド兼運転手にせがみお墓のはしごをしてしまった。ここは駐車場から階段を下りていくと切り立った崖があり洞窟が口を開けている。入り口付近には棺桶や人骨が散乱している。

ここへ入るにはガイドを雇うのが無難で灯油のランプとガイド料（寄付金）込みで 10 万円ピアぐらい払ったらよいと思う。洞窟内には棺桶があちこちにつこんであり、骸骨が所々に並べてあった。窪みに並べてある骸骨をバックにここで写真を撮るといいですよというようなことをガイドさんが勧めてくる。人のお墓の中なのにセルフイーは全然オッケーなのだ。まだ髪の毛がついているような死体を見せたり、結婚を親に許されず無理心中した男女の遺体の説明をしたりと、何と言っているのか分からない体験をさせてもらった。

2 日目、早朝に起床し Negeri Di Atas Awan（雲の上の国）別名 To'Tombi へ行った。早起きが苦手な妻もセルフイー名所のこの場所へは行きたかったらしく早起きをしてくれた。ランテパオの町からほんの 30 分ぐらいの小さな山の展望台である。道もきれいに舗装されており誰でも気軽に行ける観光地であった。山を登り始めると間もなく雲の中に入り、そして雲の上に出た。そして展望台に着くとそこは見事に雲の上で雲の隙間から集落や田園風景が垣間見られる。ここにはそこそこインドネシア人の観光客が来ていた。そして皆セルフイーを撮るのである。もちろん我々もセルフイーを撮りまくった。

ここで飲んだ現地風の甘いミルクコーヒーも幻想的な風景と澄んで冷たい空気の中ではよくなじんで美味しく頂けた。この後山を下り有名な水牛の市場があると言うのでそれを見がてらお土産用のトラジャコーヒーを買いに行った。水牛はほとんどがお葬式などの儀式に使われるもので高い物は 1 千万円ぐらいするものもあるそうだ。それは見た目が重視され白っぽいのが高いのだとか。なにかビジネスに繋がりそうだなと考えたが水牛を飼育するのは広大な土地が必要で牛の牧場のように何十頭もまとめて飼育するのは難しいらしい。

トラジャには水田が多くみられたが水牛は田畑を耕すためには一切使わないそうだ。それから通常、水牛の肉は出回っていないのでレストランで水牛料理も出していない。そんな訳で水牛料理は食べそこない、トラジャの伝統的な料理もほとんど食べる機会がなかった。トラジャ

に知り合いなどいたらいつか何かの儀式に出席してトラジャの伝統的料理も食してみたいものである。

知り合いと言えば木谷さんの奥さんのお母さんはこちらの出身だそう。さらに義兄さんの奥さんは前述のケテ・ケスのお墓に死後入る権利があるほどの貴族の系列らしい。余談だが、その貴族の女性と結婚した義兄さんもケテ・ケスのお墓に入ることができるのだそう。よけいな世話だが残念ながら木谷さんはそのお墓には入れない。

この水牛市場の近くにトアルコ・ジャヤ社の事務所がある。そこへ寄ってトラジャコーヒーを箱買いしてきた。と言っても現金のみの取り扱いだったため手持ちの 100 万ルピア以内に収めるよう計算しながら数種類のコーヒーを購入して箱に詰めてもらったという意味だ。通常のものからアイスコーヒー用、エスプレッソ用など数種類が売られていた。最近ではドリップバック式のカップ一杯分毎に小分けにされているものも売れているそう。

その後一旦ホテルに戻り昼までゆっくりして荷造り後バスの出発まで時間を潰さなければならぬ。バリのような先進的な観光地ではないのでソファでゆったりできるようなカフェはここにはない。少し街中をウロウロしたが結局ホテルに戻ってロビーで待たせてもらった。

夜になりバスに乗り込む。朝目が覚めればマカッサルである。あるいは目が覚めずに雲の上のさらにもっと上の国に着いているかもしれない。

鯨を食べよう（II）

長崎 節夫

今年も大詰めを迎えた 12 月 20 日、インターネットニュース、テレビニュースなどで「日本政府が国際捕鯨委員会（以下、「IWC」）を脱退の方針」と報じられました。続いてクリスマス明けの 26 日には菅官房長官が記者会見し、日本政府として正式に「IWC を脱退する」と発表しました。（脱退の手続きはこれから始まる）

このニュースを受けて、マスコミ各社や捕鯨関係者に野次馬も交えて賛否両論沸き上がり、平成 30 年の年末はくじらの話題で締めくくりという状況になっています。付和雷同というわけではありませんが、私も鯨の話題で今年を締めくくりたいと思います。

「タルシウス」第号でも触れたとおり、現在の IWC 内部では、商業捕鯨再開をめざす国々（捕鯨国）と、このまま永久に捕鯨を禁止したい国々（反捕鯨国）が対立しています。問題の根っこになっている商業捕鯨一時停止（捕鯨モラトリアム）は、1982 年の IWC 年次総会で議決されました。この捕鯨モラトリアムの本来の目的は、「捕鯨を一時停止」することによって、これまでの乱獲で減少しているクジラ資源の回復を図ろうということでした。

あれから約 30 年、日本はじめ関係国の資源調査活動によって、ミンククジラなど一部のクジラは資源が十分に回復していることがわかっています。それなりの秩序を保って捕獲すれば十分に商業捕鯨は成り立つということで、近年は IWC 総会のたびに日本など捕鯨国側から捕鯨再開案件が提議されるようになりました。それに対し、アメリカなど反捕鯨国は、「資源量が問題ではない、クジラを捕獲するか保護するかが問題なのだ」と、モラトリアムの設定当初の論点を動物愛護の問題にすり替えて、結局、数の力で捕鯨再開の要望はつぶされ続けているというわけです。

今年（2018 年）9 月、ブラジルで開催された IWC 年次総会では、日本側代表団は捕鯨再開の決議を勝ち取るべく、例年より参加陣容を強化して臨みましたが、アメリカを中心にした反捕鯨国の厚い壁をやぶることができませんでした。マスコミ報道によれば、この年次総会が終わった時点で日本政府は IWC 加盟のままでは商業捕鯨を再開することは不可能と判断し、IWC 脱退の意向を固めたようです。IWC を脱退しても国連海洋法関連の制約があって日本単独で勝手に商業捕鯨を再開することはできないそうですが、日本政府としては何らかの成算があるのでしょうか。

「日本政府、IWC を脱退して商業捕鯨再開を目指す方針」というニュースを聞いて、とっさに思ったことは次の二点です。

一つは「ついにやったか」という思い。日頃から、捕鯨に関してはいつも反捕鯨連合軍にいろいろやられて、このままでは勝ち目はないと感じていました。日本が捕鯨再開を目指すなら何か思い切った策（例えば IWC 脱退とか）をとらざるを得ないだろう、と思っていました。

もう一つは、アメリカが主導する国際機関（IWC）から日本が足ぬけすることに対する（軽い）驚きでした。敗戦後 70 年余、アメリカ抜きでは呼吸すらできなかったほどの日本国です。簡単に「抜ける」と言って大丈夫だろうか。これから欧米相手の外交関係で嫌がらせを受けるのではないかと少々心配でもあります。しかし、政府が破れかぶれで脱退を発表しているわけでもないだろうし、それなりの目算があるのでしょうか。

昨年（2017 年）、環太平洋経済連携協定（TPP）の枠組みからアメリカが足ぬけしました。その後日本主導で作業を進め、今年（2018 年）末ぎりぎりにとりあえず（11 か国のうち）6 か国の発効にこぎつけました。残り 5 か国もそれぞれ各国内での条約批准を終え次第、正式に協定参加の予定だそうです。この事実は「アメリカ抜きで（日本国が主導して）」国際協定締結を進めたという珍しい事例になります。TPP の場合は親分アメリカが途中で変心（乱心？）して脱退したために番頭格の日本がひと踏ん張りしてまとめあげたという構図ですが、国際関係の中で日本がこのようなリーダーシップを発揮したということは、これが初めてではなからうか。

そして今回の IWC 脱退です。敗戦後 70 余年を経て日本も少しは成長し、曲がりなりにも自立の意識が芽生えてきた、ということでしょうか。

a. 西洋の捕鯨事情—ノルウェー

地球の裏側西洋にも、日本と同様に古い時代からクジラを食用として利用してきた国々があります。代表的なのがノルウェー、そしてアイスランド、グリーンランドなどです。イギリスも昔は捕鯨国で、南氷洋捕鯨の最盛期には船団を仕立てて南氷洋まで遠征したのですが、現在は親戚アメリカと歩調を合わせて反捕鯨国になっています。

現在、大西洋側で商業捕鯨再開に執念を燃やしている国はノルウェーとアイスランドです。ノルウェーは言わずと知れた捕鯨の先進国で、歴史的にも世界の捕鯨業をリードしてきました。現在一般的に行われている、捕鯨船の船首部に大砲を据えてクジラを撃ち仕留める捕鯨技術はノルウェーが発祥の地で、日本もそれに追随しています。

1982 年に南氷洋捕鯨の一時停止（捕鯨モラトリアム）が決議されたとき、ノルウェーはもちろん反対の立場でした。「商業捕鯨は何とか続けたい」ということで、捕鯨モラトリアムに

異議申し立てをして（賛成しないで）、IWC は脱退しないで北大西洋の商業捕鯨を続けています。ノルウェーは IWC による捕鯨禁止の決議に“同意しないことを表明”して商業捕鯨を続けているのです。この捕鯨モラトリアムは多数決に従わなくてもよいということです。商業捕鯨を続けると言っても、最大の漁場・南氷洋は全面捕鯨禁止（調査捕鯨は除いて）ですから、ノルウェーの捕鯨船は自国近海で細々と捕鯨を継続し、捕獲した鯨肉の一部は日本に輸入されています。

実は、わが日本もノルウェー方式（禁止に同意しないで）で商業捕鯨を続けることを考えましたが、親分アメリカから「そうであれば日本トロール漁船によるアラスカ沿岸での操業を許可しない」という対抗策を示されて降参しました。

当時、日本の遠洋トロール漁業がまだ健在で、特にアラスカ沿岸はトロール漁業の重要な漁場でした。アラスカ沿岸のタラを確保する引き換えに南氷洋のクジラを諦めることにしたわけです。しかしその判断は、結果から言えば大間違いでした。そのころからくすぶり始めていましたが、海洋管理の分野で「排他的経済水域」という考えが出てきました。各国が目の前の海を‘排他的に’管理することができるという考え方です（別名、200 カイリ経済水域）。アメリカは早速、アラスカ沖にもこの新しい秩序を適用し、日本のトロール漁船は閉め出されました。鯨の代わりに確保したはずのアラスカ・タラ漁場は何だったのか。（ノルウェーの話がアラスカに跳んでしまいました）

b. アイスランドとクジラ

ノルウェーの西方、北海のほぼ中央にアイスランド共和国があります。共和国の主島・アイスランド島の中心部は北緯 65 度、西経 18 度ですから北極圏に近く、火山、温泉、氷河が売り物の観光地です。アイスランド島の面積はおおよそ北海道と四国を合わせた面積とのことですが、人口は約 34 万人。数字だけみると過疎地で土地がいっぱい余っているという感じがしますが、陸地のほとんどは火山性の岩石に覆われた険しい山地で、人が住めるような環境ではありません。住民は海岸沿いの狭い平地に住んでいるので、その部分は結構な人口密集地になっているそうです。

島の南側に、幅約 100 キロ、奥行き 50 キロほどの大きな湾があります。外側からみて湾の右手の奥に首都レイキャビク市があります。つまり、レイキャビクのななめ前には広大な湾が広がっている形になります。この湾は古来、鯨の集まる場所として知られ、8 世紀ごろ、アイスランドがまだ無人島の時代からノルウェーの漁師たちがクジラ漁に来ていたそうです。湾の名称もそのものずばり「クジラ湾」です。

ノルウェー漁民のほかにアイルランド、グリーンランドからの移住者もあって、彼らが現在のアイスランド国民の始祖であります。

現在のアイスランドはその特異な景観（火山、湖、氷河）でもって人気の観光地になってお

り、欧米やアジア各地、もちろん日本からも多くの観光客がやって来るそうです。観光のお目当ては陸上の自然景観と海上（くじら湾）のホエールワッチング。

ところで、ある調査機関がレイキャビクの（ホエールワッチングの）観光客にアンケート調査をおこなったところ、20%の客がレイキャビクのホテル、レストランなどで鯨を食したと答えたそうです。何しろ歴史始まって以来の捕鯨国です。クジラはアイスランド国民にとって日常的な食糧であり、観光客がホテルや町中で普通にクジラ料理を食べることができる環境にあるわけです。普通の観光客にとっては、泳いでいるクジラを見物するのと料理されたクジラを食べることとは矛盾することではないのでしょうか。賛成か反対か、どちらか一つを選ばなくてはいけないということはない。私だって、泳いでいるクジラを見物するのは好きだし、クジラ料理も大好きです。レイキャビクでクジラ料理を提供するレストランは年々増える傾向にあるそうです。この状況に危機感を持ったグリーンピースなど環境保護団体（反捕鯨団体）は「クジラを食べるな」キャンペーンに一段と熱をあげているとのこと。有史以来のクジラの島で「クジラを食べるな」と言うのも無茶な話ですが、原理主義者たちは無茶を承知で自分の価値観を他人にも押し付けるのでしょう。

ところで、レイキャビクの眼前に広がる「クジラ湾」ですが、アイスランド政府はこの広大な湾（幅 100 キロメートル奥行き 50 キロメートル）をほぼ二つに分けるように線を引いて、陸地寄りの半分はホエールワッチングエリア、外側半分は捕鯨可能なエリアとして区分しました。ある時期、捕鯨に消極的な政党が政権を握った結果、湾の中央に引かれた分割線は外側にずらされた（つまりホエールワッチングのエリアが広がった）そうですが、また元の政権に戻って分割線も元の位置に戻されたそうです。

人間が勝手に海の上に線を引っ張って、こちら側はワッチングのエリア（捕鯨禁止）、向こう側は捕鯨可能エリアと決めつけ、当のクジラたちにはそのことが伝えられていません。今しがた環境客の目の前を泳いでお客さんを楽しませていたクジラが、何分か何時間か後には向こう側（捕鯨エリア）を泳がないとは限りません。そこで捕鯨船に見つかって、ズドンと一発喰らう可能性があります。クジラは明日の晩あたりにステーキになってテーブルに運ばれ、お客さんを喜ばせる、ということも起こり得るわけです。

c. 沖縄のイルカ漁

地球のこちら側、日本列島の最南端沖縄にも 1950 年代の一時期、（沿岸）捕鯨業がありました。当時は捕鯨ブームともいえるほど日本全国的に捕鯨業が流行りました。南氷洋だけがクジラの漁場であったわけではないのです。

そのような時代の中で、米軍統治下の沖縄にも小型捕鯨漁船を使用する捕鯨業が導入されましたが、私が物心ついた 1960 年代には捕鯨業そのものは消滅していて、鯨を浜辺の水際から処

理施設まで引き揚げる斜路だけが残っていました。というわけで私は当時の沖縄の捕鯨についての記憶はほとんどありません。

私がこれから書くのは、漁業（事業）として行われていた捕鯨のことではなく、沖縄県名護町（現在は名護市）でお祭りの行われていたイルカ漁のことです。

沖縄・名護町（現名護市）の前浜に寄せてきたイルカの種類は不勉強でよくわかりませんが、とにかく毎年、春になるとイルカ便りというか、新聞ラジオで、名護の浜にイルカが“寄った”というニュースが流れた。

「名護湾」は近頃有名になった名護市辺野古とは背中あわせの場所にあって、東支那海に向かって L 字状に開いています（辺野古は太平洋側）。L 字の角の部分が名護町の海岸、砂浜です。海岸から沖の方（南西方）を見て左側が恩納村の海岸線、右手が本部（もとぶ）半島の海岸線、沖合は東支那海に続きます。

イルカ狩りは、名護の沖合にイルカが現われることで始まります。漁師か誰か、目ざとい者が沖合にイルカの群れがいるのを見つけて、「ヒトドーイ（イルカだぞ!）」と騒ぎだてて祭りが始まります。地元の浜にいるサバニ、小型の漁船などは総動員。漁師はもちろん、漁師でない者も文字どおり押っ取り刀で駆けつけて、イルカの追い込み漁に参加します。小舟はイルカの群れの背後（沖側）や側面に回り込んで、櫂や竹竿で海面を叩いて、イルカの群れが名護の海岸に向かうように追い込みます。

私が若造のころのある日、イルカが名護の浜に寄った、という新聞ニュースを見て、日ごろから不思議に思っていたことを職場の先輩に尋ねました。追い手の小舟がいるとは言え、まだ海岸から離れている広い湾口では逃げようと思えば横にでも後ろにでも、自由自在に逃げられるのではないのか、最初から逃げ道はこれしかないと思ったかのように名護の砂浜に向かうというのは何故か。イルカは利口だと言われているがそれほどでもないようですね。大先輩の解説は次のとおり、かなり説得力があり、私は今でもそれが正解であろうと思っています。

沖合にいるイルカから名護町の方を見ると左手は本部半島の山地、右手も山地で標高が高い。名護の市街地の部分だけが標高が低く、水面に浮かぶイルカの眼にはその部分が‘切れている（海峡になっている）’ように見えるそうです。イルカは追われても追われなくても、海峡を通りぬけるつもりで名護の町を目指して泳ぐということです。しかし近づいてみたら陸地が現われて、潜って逃げようにも海はすでに浅くなっていて潜れず、追い手の小舟も密集してきて、右からも左からも鉈が飛んでくる。包丁を持った人間もとびかかってきて、一卷のおわり、というわけです。

「寄りもの」という言葉があります。人間が能動的に動いて（舟で沖に出たりして）獲物を手に入れるということではなく、魚群あるいはクジラなどが浜に寄せてきて浜辺の住民を喜ばせる。向こうから勝手に寄ってきて近隣住民の糧となる。日本人は古来、寄り物に神の意思を

感じてありがたく頂いてきました。名護のイルカもその一種でしょう。浜に寄ってきたものは特定の誰かの所有になるものではない。突然降ってきた天の恵みは皆で分け合うということで、追い込み漁に参加した者も浜で見物した者も適当にお土産が分配されました。しかし、小さくても体長2, 3メートル、大きいのは5, 6メートルもあるイルカが一度に数十頭も獲れますから、獲物すべてが分配されたということではなかったようです。その日の午後はイルカ肉の入ったタライを頭に乗つけた行商のおばさんたちが、「ヒトコーミソーレ」と声をかけながら町の住宅地を歩いていたそうです。コーミソーレは「買って下さい」ということですから「ヒトはいらんかね」の意味になります。「ヒト」は人間ではなく、イルカのことです。

名護の浜で捕獲されたイルカ肉を一度だけ食べる機会がありました。沖縄島に20年近く住んでいて、イルカ肉（クジラも含めて）料理にありついたのは、あとにも先にもその1回きりです。まだ食べ盛り的高校生で、目の前に出てきた食べ物は何でもおいしく食べる年ごろですから、ほんとにおいしく頂きました。ただ、その時は食べることに注力して調理法などには関心がありません。覚えているのは「みそ味」の煮込みであったことだけです。ニンニクの葉やショウガなどを使ったみそ和えであったと思います。

現在、沖縄でイルカ（クジラ）料理に出会うことはまず考えられません。ものの本によると日本でイルカの獲れる地方のイルカ料理（郷土料理）は実に多種多様、読んでいてよだれを抑えるのに苦労するほどですが、わが沖縄は観光業者むけのホエールワッチングはありながら、スーパーマーケットにも魚屋さんにもイルカ（クジラ）のひとかけらも置いてありません。郷土料理と言え、豚肉と豆腐をつかったゴーヤーチャンプルーくらいのものでしょう。

名護のイルカ漁も自然消滅したようで覚えているのはお年寄りだけです。もともと、文化というほどのものでもなかったのでしょう。

(完)

編集後記

今号は1月中に発行の予定が、いろいろあって2か月おくれの発行になってしまいました。日本では桜開花のニュースも聞こえ、学生・生徒は卒業シーズンに入っています。

すでに会員も皆さまご存じのことと思いますが、会員の落合さんの身の回りにご不幸がありました。事故に遭われたデシーさんのご冥福をお祈りし、併せて落合さんの再起を祈ります。

昨年11月にはマカッサル領事事務所の宮川所長をメナドにお迎えして、日本人会会員の皆様ご参列のもとに不肖長崎の外務大臣表彰伝達式が催されました。

宮川所長はこのあと今年2月にもメナドに来られて、これは日本人会と直接の関係はありませんが、市内で開催された日本語文字コンテストに参列されています。(詳細は中村さんから報告)

日本語パートナーズの皆様は3月末に任期満了で帰国することになりました。パートナーズの当地での任務は「日本のファンを増やすこと」だそうですが、皆さんも北スラウェシのファンになられて、新婚旅行あるいはご家族の旅行などで気軽に立ち寄ってください。再会を楽しみにしています。皆様のなお一層のご健康とご繁栄を祈っています。

「タルシウス」の表紙に平成00年と記すのもこの号が最後になります。次回、新しい元号を冠した会報の発行は7月の予定です。編集担当者としてもフンドシを締めなおしてがんばります。

(長崎)

会員名簿

会報「タルシウス」電子版では不特定多数の方が閲覧するため、セキュリティ上の観点より会員名簿は非公開とすることとしました。

(2014 年 04 月 20 日)

上記理由により会員名簿が非公開になりましたことをご了承ください。

●会報タルシウス（製本版）には従来通り名簿は掲載されます。

●各会員に対しましての個別の、または、尋ね人などのお問い合わせは、

直接日本人会へお問い合わせください。

該当会員に連絡後、会員より直接連絡するか該当会員の同意のもとで、

連絡先をお知らせすることといたします。